

コンケン大学での居候生活 (30)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

チェンマイ大学からコンケン大学に移ってもう少しで1年になろうとしている。この辺で、移籍に当たり交わした契約内容について、何処までその内容を達成できたかと言うチェックをして見る。契約に先立ち採用後の仕事の内容に於ける筆者の果たすべき事項(TOR, Terms Of Reference)は次のようである。大別して4つありそれらを以下に示す。

1. Being a co-lecturer in some course for instance;

工学部の学生・院生を対象に

● Achieved (達成)

1.1 Work preparation & Continuing Self Development, Learning Skill Development (Undergraduate level)

学部生約150名を対象に上記のテーマで約1時間の講義を遠隔授業で行うこと。

1.2 Engineering Research Methodology

(Graduate level)

院生約20名を対象に上記のテーマで約1時間の講義を遠隔授業で行うこと。

この上記2つの講義については2021年4月16(土)、17日(日)にそれぞれ1時間余に亘り講義した。講義を始めるに先立ちアンケート用紙を用意、配布して氏名、所属学科、学部生・院生の別、講義内容についての乾燥、特に興味、関心のあった講義内容、卒業、終了後の生き方、進路(就職か、進学かなど)、英語での講義の理解度の自己評価などを記入させてメールで提出させた。

2. Being a consultant in writing manuscript for students and staff at least more than 20 Manuscripts

年間20編以上のスタッフおよび学生の論文作成指導の相談に応じること。

● Not achieved (未達成)

何故未達成なのか?については次のように理由を列記して説明する。

- 1) スタッフや学生院生の側から全く連絡も要請も無かったこと。
- 2) 相談に乗って欲しいと願い出るスタッフや学生が全く居なかった事に加えて、そうした対象のスタッフ、学生院生に誰がどの様に連絡をするのか、その役割、責任を誰が持っているのかが明確でなく、不明であったこと。
- 3) コロナ禍で殆どの学生院生、スタッフが大学に来ておらず、自宅での待機生活が日常的に、また長期に亘りその状態が継続為て、相互に知らぬ関係の元では連絡のしようが無かったこと。

と言う事に要約される。さらに、これまでの筆者の経験から院生、スタッフの研究論文の

チェック、添削、閲読となると指導教員の了解が必要となる。勝手に相談に応じても指導教員の意見が反映せず、反感を買うと人間関係が悪くなり、折角の助言も無意味になる。そうした事前の了解を誰が責任を持ってアナウンスして希望者を探し出すか、と言う部分が明確でなかったことが、未達成の主たる原因と言えよう。結論から言えば、研究論文の閲読、添削に関するシステム構築が成されておらず、また責任者が誰かも明確でないことが原因と言えよう。この状況では誰がその役割を要請されても、初めから要請者がゼロでは論外である。しいて言うならば、隣室にいるスタッフがその役割をになうべきであるが、事務サイドのスタッフでは話しが通じず、ラチがあかない。コロナ禍と言う事で、研究指導に関わる教員の誰もからも連絡は無い。こうした状況の下で如何に目標を掲げても始まらない。またこの状況を認知し、改善しようとする者も決まっていな。これでは掲げた目標を達成できるはずがない。コロナ禍で動きがとれない事は誰もが承知しているが、ではどうすればこの状況を改善できるかを提案し、具体的に行動を起こす者はいない。対象学生院生、スタッフのモチベーションが高くないと言う事になる。 **Don't leave me alone!** (私を一人ぼっちにして置かないでくれ) と何度も言い続けてきたが、事態は一向に変わらず、筆者の言っている事がどうも理解されていないのではないかとさえ思われる無対応である。手の施しようがない状況でここまで来たと言う感じである。

関連の学術誌に掲載された研究論文数は学位取得のみならず、教員の昇格、昇級にも大きく影響するばかりか、大学のランキング評価にも大きなファクタとなる。しかし、研究論文は、その1) オリジナリティ (独創性)、2) 学術的見知、3) 実用化への適用可能性、の3つの観点から評価され、特にオリジナリティが論文の価値を左右する。また研究 (論文) の作成にあたっては研究者本人の努力が70~80%、20~30%が指導教員の助言や予算的支援、参考書や人的ネットワークおよびその紹介や機会の供与、残りの10%は「運」によると筆者は考えて居る。「運」とは良き指導者との出会い、病気をせずに権苦であり続けること、研究の内容が時流に合致して居るなど、諸々の受験要素が含まれ、これの全てが揃って初めて1つの研究論文が出来上がる。幸運にも奨学金を支給されても、課程半ばで病気になれば全てが停止頓挫する。こうした背景を考慮せず、成果のみを早急に求める姿勢は単なる業績稼ぎに終わり、評価の低い成果にとどまることが多い。学位取得には一般に2編ほどの国際学術誌に論文が受理、掲載される事が条件であるが、学位は自動車運転免許証のようなもので、研究職や大学の教員となるために必携の資格であるから、若いときは十分に高い評価に耐えるレベルでも一人前の研究者になるための出発点ということでその能力を示す資格を示すのが学位であると解すれば、それはそれで良いが自分の研究論文に責任を持たず、その殆どを他人に「丸投げ」という姿勢では、楽して金を儲ける姿勢に通じ、以後の学術活動にも大きく影響する。すなわち「努力もせずに他力本願になる」という方向に考えが固まると「商人」のような大学人が出来上がる。研究を通じて社会に貢献するのでは無く「自由に使える予算、資金が欲しい」という人間ができることになる。だから研究論文1本を掲載させればいくら支払うと言う「論文作成代行

まがい」のビジネスを提唱して、この目的のために兵員を雇用している大学も少なくはない。何が為かというパブリケーション数を挙げて活発な活動をして居ることを示すことであり、ひいては組織（研究所、大学、学部）のランキング向上が狙いである。また論文チェックを依頼する側も院生と言う事であるが、必ずしもその身分だけではなくスタッフであって、なおかつ博士課程の学生の身分を持つ者も少なくない。個々に異なるテーマで、しかも異なる能力（英語のみならず、論文の構成、組み立てなど）において異なる各自が決まった時間に来るわけでもない体制では無駄が多く、効果が上がらないことは目に見えている。しかも修士、博士課程の学生には個々に指導教員が付いているから、いくらかでも指導教員と違った指示を与えると指導教員、院生、さらには論文閲読修正に加わった3者の間で関係が悪くなる。相互に良く理解した上での合意となるのは難しく、最終的に派どちらかの主張を選択採用しなければならない。いずれにしても、直接または間接的にも論文チェック要請のコンタクトがなければならない。そうした要請が無いのに此方から相手を探す事は出来ない。基本的に論文作成、チェック・システムができていない。要請が無いと言うことはその意思もなければモチベーションも低いと言うことになる。まずはこの辺から考え直す必要がある。如何にコロナ禍であろうと連絡を取ることぐらいは、本人にその気があればできるわけだから、連絡要請が無いと言う事はその意志（意思）がないということであり、モチベーションも低いと言う判断になる。上記の様な事情で目標は未達成と言う事である。

3. Being a coordinator to work on Sakura Orchid Program to support / seek at least 10 exchange students / year

● Not achieved （未達成）

この事業についても未達成である。その理由は、基本的に日本の協定大学との連携で進めるプログラムで、相手大学との交渉、合意がなければ進まない。これまでもこのプログラムに参加為たと言う学生からいろいろ聞いたが、送り出す側のプログラムに対する趣旨、目的への認識が余り明確でない。参加為た本人にとっては海外の大学を見ることに感動を覚えるが、大学としての教育面でのフォロー、支援のあり方などに焦点が定まっていない部分を多く見る。また1年で協定校との事業の実現を望んでも、余程の幸運が伴わなければ、審査を経て受理・承認とは成らない。今日言えば明日に実現するという物ではない。この辺の理解がいくらかずれているように見える。年間10名ほどの学生（スタッフ、院生を含む）にこのプログラムに似た形で送り出すことが、与えられた任務であるので、叶わぬ時は自腹を切っても対応をと意気込んでいたが、コロナ禍で「海外への渡航禁止令」でとりつくしまもない。実施にあたっては、予算はともかく規模の大小に拘わらず、訪問相手先との折衝、打ち合わせが必修であり、これもコロナ禍のもとで思うようには行かず、計画ができて動きがとれない。と言う事でこれも未達成に終わる。代わりに提案したのが以下に示すプログラムで筆者はその創始者の一人であるが、やはりコロナ禍で参加学生への十分な情報提供、共有拡散が難しくポシヤる見込みである。厳しい状況だけに

できるだけ可能な機会を捉えて学生参加を促す対応が必要であるが、そうした動きは見られない。例外的にでも参加者の選考を実施し、積極的参加に向けた対応をする姿勢が欲しいが現状はとてもその様な状況ではないらしい。結果として大学野公式参加はキャンセルとなった。

◎ **The other possibility instead in near future (This coming October to November)**

The 27th Tri-University International Joint Seminar & Symposium organized and hosted by Guangxi University, China

The 2021 Tri-U will be held from October 31st to November 5th, 2021 at Guangxi University, China. As I said last time, participants from China will gather at the proofreading university to participate, but overseas participants will participate online.

The following Attachment I shows the tentative Program of TRI-U program

.....
Attachment I

The 27th Tri-U International Joint Seminar & Symposium 2021
Guangxi University, China

TENTATIVE SCHEDULE

Sunday, Oct. 31, 2021

- Arrival and Registration (offline) / Testing Video Conference System(online & offline)

Monday, Nov. 1, 2021

- Opening Ceremony / Plenary Session, Parallel Presentation / Workshop Orientation (online & offline)

Tuesday, Nov. 2, 2021

- Cultural Observation and Exchange (offline)

Wednesday, Nov. 3, 2021

- Parallel Presentations / Workshop Presentation / Poster Presentation(online & offline)

Thursday, Nov. 4, 2021

- Poster Presentation / Key Person Meeting / Closing Ceremony (online& offline)

Friday, Nov. 5, 2021

- Departure (offline)

URL of Tri-U Webpage sent from Guangxi University is shown below.

<http://gjy.gxu.edu.cn/en/triu/list-173.html>

However it can't be opened yet.

The following is the Guidance mail sent from Guangxi University as shown below.

Please do not hesitate to email your contact person, Ms. Yangyang Li, yyli2017@foxmail.com, if you have any questions. You can find more information about the symposium at

<http://gjy.gxu.edu.cn/en/triu/list-173.html>

after June 1, 2021.

4. Submit Research Proposals at least 2 proposals / year to oversea funding

最後の義務は海外の研究助成支援財団に研究提案書を最低限2つ出すことである。

● Not done yet, but

これも未達成に終わる見込みである。なぜなら、筆者は手元に学部の研究者の資料（CV）は一切持ち合わせていないからである。共同研究テーマを考え、設定しようにもどのような研究者がどのような研究を行っているのかと言う肝心のデータが無ければ共同研究は成り立たない。申請書に自分一人の名前だけで受理されるはずはない。なぜ、そうした対応が取られていないのか、未だ不思議である。そんなことは万が一にもある事はないであろうが、仮にそうした申請が受理され、審査を経て予算支給が認可されたときのステーク・ホルダー（受益者）は誰なのか。言わなくとも申請書に名前を連ねている研究者のみに予算配分執行の権利が生まれる。名前も書かれていない研究者に予算配分、支給が成されないのは「当然」である。基本的資料の提出もなく宝物が見つかったから「山分け」してくれと、まさか言い出す事はないと信じたい。タイの大学人の中には自分のCVを提出することを渋る（あるいは抵抗する）人が少なくない。その理由は不明であるが、1）恥ずかしい、2）他人に見せたくない、3）見せて利用されたくない、と言うことが的を得た所ではないであろうか。基本的に共同研究をしようというスタンスではないように見える。また申請額についても国際的な財団への申請となれば少なくとも数千万円から時には億の単位となろう。それだけの予算申請に対して研究の中身は無論のことCVすら整っていないと言うのでは論外である。ここでは出された要望に対して「未達成」として居るが、申請の行為をしていない訳ではない。しかし、自分と数少ない知人の個人的データしか提供されていない状況では研究プロジェクト・チーム・リーダーを知人に依頼するしか方策はない。また日本の研究助成機関への申請となると、タイ側から直接申請することはできないのが普通であるから、研究プロジェクト申請に対する認識が基本的に間違っていると云わざるを得ない。

上記一連の内容をPPTを用いてプレゼンをしたとき、居合わせた学部長補佐の一人が副学長に会ってくれと言う発言があったが、その話しはそれ以後消えたい。一時的な慰めにも聞こえ、いささか気落ちした思いがしないこともない。上記学部長補佐と会うのも初めてであり、筆者の話しを聞いて「これは重要」と、その時認識したのかどうかはともかく、日頃から頻りにコミュニケーションがあれば「ツー・カー」で話は通じるが、始めて逢うのでは、誰しも相手はどんな人間なのかと言う警戒心も働く。何が故にそうした

情報の共有から学ぶと言う姿勢がないのか、これは何処の大学でも同じかと思うが、新しい事（知識、情報、人材、その他）に関する知識獲得への積極性以上に、自らのポスト維持に専念しているからこのような事になる。前回は既述したが、新しい人と知り会っても、一時的な関係以上に発展せず、将来的にもことある毎にそのイベントの成功に向けた対応しかせず、フォローがないから、相互信頼が蓄積されない。日本のみならず海外の大学との新しい関係の展開、協力体制の維持も金が目当ての対応だから、いつまで経っても評価は上がらない。業績増加のために論文を大量生産できる者の雇用に執着しているかに見える。だからまともな教育ではなく「金儲けの仕方」教育が優先しているようなものである。フレンドリーでもなければ、うわべだけでそこそこのつきあいを維持する程度の認識しか持ち合わせていない。だから関係や、つきあいがその場限りで「持続可能」な者にならない。この体制に於ける最も重要で致命的な欠点は、「誰の為に、何の為に」という部分が全く眼中に無いことである。全てが管理者である「組織長」の自己保身に端を発しているからである。